



## 「からゆきさん」の墓を訪ねて

門 更月

今回で7回目となる「東南アジア平和交流の旅」の行き先はマレーシア領ボルネオ。2002年12月26日の早朝6時過ぎに長崎の自宅を発って、クアラルンプール経由でボルネオ島キタコナバルに到着したのは夜中の11時半近くだった。遠い南洋の島に来たと実感した。こんな遠くまで「からゆきさん」たちは来たのか。こんな遠くまで日本軍は侵略を進めたのか。

翌日キタコナバルから飛行機でサンダカンまで飛んだ。サンダカンといえばやはり山崎朋子作「サンダカン八番娼館」が真っ先に思い出される。私自身は20数年前の学生時代に読んだ記憶はあるのだが、内容はほとんど覚えていなかった。映画の方も栗原小巻という女優が出演していたことしか記憶がなく、団長の葛西よう子さんの資料や同行の人たちの話などで少しずつ思い出してきた。明治以降の近代化の影で貧しい島原や天草の女性たちが、東南アジアまで身売りされ、売春をさせられた。彼女たちは「からゆきさん」と呼ばれ、遠い異国の地で過酷で悲惨な生活を送り、とうとう日本に帰れなかった人が数多くいた。私たちは今もサンダカンに残るからゆきさんの墓を訪れることができた。草が生い茂る小高い丘の斜面に石の墓標が十数基立ち、墓標の大部分には日本人女性の名前が書かれていた。それらの墓標はみんな海の方を向いて立っていた。海の遙か彼方の日本に思いを寄せてのことだろうか。墓石のそばで雨上がりの涼しい風に吹かれながら、私は思った。結局、国家というのはいつも弱い立場の人々を犠牲にするのだ。それは貧しい者であり、中でも女なのだ。出稼ぎ労働者の男たちを働かせるために女をあてがうのだ。戦争中の慰安婦制度もこの発想で作られたのではないか。稼げるからと女たちをだまし、または無理矢理連れてきて、兵士としての男の相手をさせる。女を人間ではなく、男を働かせたり、戦わせたりするための道具と位置づけ、国益のために利用する。女性差別の構造は同じだ。私もまた同じ女性として怒りがこみ上げてきた。からゆきさんたちの無念さ、悲しみはいかばかりであったか。このような女性たちを二度と作ってはならないという思いに、改めて気を引き締め、墓地を後にした。

この後「サンダカン八番娼館」の跡を訪ねたが、現在は商店街の中程の薬局になっていて行き交う車や近代的なビルからは、このあたりに日本人女性ばかりでなく中国人女性の娼館も合わせて20数件建ち並んでいたことは想像すらできなかった。





「サンダカン八番娼館」の跡

隣り合ひの二軒の薬局だった

からゆきさんの墓が立ち並ぶ丘



## サンダカンで考える



葛西よう子

冬の日 サンダカンの日本人墓地に立って 目の下に広がる青い海 青い南国の空 足下の小さい「からゆきさん」の墓石群に囲まれて 日本近代化の渦のなかで撥ね飛ばされ 傷つけられた女性たちの哀しみと無念さが 私の心のなかに渦巻いた。

私は今 長崎における女性史の資料集を作ろうと 明治時代の新聞から女性に関する記事を書き抜いている毎日なのだが そこに報道記事として出てくるのはほとんどが娼婦の

記事 なかでも群を抜いて多いのが密航誘拐婦と呼ばれている「からゆきさん」関係のニュースである。石炭積み込みに長崎港に寄港する船の船員を買収して 数人～数十人の少女を連れた誘拐者とよばれる男たちが乗り込んでいるのを探知した長崎水上署が逮捕したというニュースが ほとんど連日のように掲載されている。運良く？生きてホンコンやウラジオストックに到着できた（暑い船底の石炭庫で石炭の下敷きとなったり 隠れていた給水タンクのなかで溺死したり）少女達はそこで更に奥地 シンガポールなどに送られ更に転売されてサンダカンにつくと借金は日本での300円が2000円にもなっている

誘拐者は150円位の罰金（移民法違反） 少女たちは説諭で親元へ帰されるのだがこれを報道する記者の筆は冷たい。なぜ身を売って外国へ行かねばならないのか なぜ誘拐者になる以外の儲かる仕事がないのか 明治の日本の技術無く 学歴の無い庶民の金を求めるあがきの声は「贅沢がしたい女」という軽蔑に満ちた表現でかき消されてしまっている。

次に多いのが遊廓で働く娼婦達 警察の許可なく（＝税金を納めずに）売春をして検挙された密淫売と呼ばれる女たち そして芸者達。芸者をおよし猫というように猫と呼び娼婦を白狐 白首と人以外のものとして扱うことに何のためらいもない。「筆にするのもけがらわしいが」と前置きしつつ 興味津々でえげつない記事が書かれている。何故こんなにも男性記者達は娼婦に興味を持つのだろう。馬鹿にしつつ知りたい、そばへ寄りたいという当時の男性読者の声が背後に感じられる。

時は日露戦争時代、外国へ発注した軍艦の記事、海外からの外貨送金に「からゆきさん」からのものがいかに多かったかの記事、芸者の愛国婦人会入会は是か非かの記事もある。国内で生きることができず国家によって外国へ捨てられた女達をさげすみながら、外貨獲得の愛国的行為を褒めたたえる行動の後ろに、今に続く女性蔑視と女性を非人間的労働に駆り立てて反省の色がない現在の男性中心社会との同根が見えた。



## 女の性を金儲けにする国 国の発展を性で担わされる哀史ならぬ歴史

ノンフィクション作家工藤美代子著に「カナダ遊妓楼に降る雪は」というのがある。明治の末、カナダに売られていった日本女性たちの実態を描いた本をもとに女たちの足跡をたどったものであるが、私はこれを読んで今までよりも更に怒りを覚えたのが、郷里から騙して連れて行った娘たちを売って商売をした男たちが大金を儲けて郷里に凱旋し土地の名士として名を連ねていたことである。文の中の一節に「常に女性が多大な犠牲を強いられたにもかかわらず、売春はあくまで男性の経済活動である」とある。この境遇に陥った女性を「売春婦」だの「醜婦」だのという熟語があるが、よくも言えたもので「買春夫」「醜夫」が真実を表す。



当会員がサンダカンへ行ってきた。山崎朋子の作品であらかた想像はしていたものの、現実に彼女たちの墓の前に立ったとき言いようのない怒りに襲われたという。以前韓国で、従軍慰安婦にされた女性にも面会しているが、時を超え、国を越えてもそこに共通するのは女性の性を無残にも商品化できる男社会への怒りである。

翻って今の社会現象を見てみよう。

A新聞1月に「女子高生が困るほどきた」という見出し記事が出ていた。130人が小遣い目的で全裸になったそうである。ビデオ会社社長ら逮捕とあるが、この見出しからすると女子高生への非難が見え見えである。

しかしそうだろうか。オジサンがどんなにいい話をもってきてもガンとしてはねのける倫理観が欲しい？性を金に換えるとは嘆かわしいと？貧困から家を救うためならOK、わが身の歓楽のためならダメ。そう簡単に男たちの思う通りには行くまい。女性の性を男社会のご都合主義で無残に散らしてきた、今もそれを引きずっている社会の有りようがここに至っているのだ。そして、出会い系サイト規制法制化では少女も処罰の対象にするがこれは考え方がおかしい。「水が低きに流れるようにその後の人生が決まってしまうことも多いのが売春という犯罪ですー毎日新聞・佐木隆三」とすれば大人にもっと厳しい処罰を作り、少女の人生に責任を持つのが当然である。「買春」なのに「売春」という意識か。説教の前に総懺悔と両性の尊厳を柱にした総教育が急務である。

#### 昭和シェル昇給差別で元女性社員が勝訴

1、【1月】 昭和シェル昇給差別で 元女性社員が勝訴  
「会社は昇給管理を男女別に行い、男性を優遇していた」と。 三代川三千代裁判長

2、【4月】 「新長崎方式」を有権者がストップ！  
違法献金事件で県議を辞めた父や夫の代替に立候補した妻や娘に票は入らなかった。  
今、女を出せば有利だと考えたのか、女を議員の座に座らせておけば4年後は退けさせやすいと考えたのか、議員たちの女性観が見えた一幕でした。

#### お知らせ

①、今年から会報の発行を年4回にいたします。代金は送料込みで5百円となります。

臨時号がでても変わりません。

②、3年ごとに発行する「女のノート3年」は今年10月ごろ販売が始まります。どうぞご予約ください。